



筑紫女学園大学リポジト

Memory and Narration in The Tempest

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高森, 暁子, TAKAMORI, Akiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/253

『テンペスト』における記憶と語り

高 森 暁 子

Memory and Narration in *The Tempest*

Akiko TAKAMORI

本論では「記憶」と「語り」というキーワードを手がかりに、『テンペスト』におけるプロスペローの支配の構造を新たな側面から検証してみたい。近年の政治批評によるキャリバンの格上げとプロスペローの脱特権化は、絶対者プロスペローの万能性を揺るがすには十分な成果をもたらした。しかしテキストの台詞の量においても、劇自体のイデオロギー的階層設定においても、プロスペローによる支配が現前することは明らかである。以下では、卓越した語りの能力を用いて他者の記憶を操るプロスペローの支配の構造を明らかにするとともに、「記憶」を媒介として劇中の自己と他者が、過去と未来が織りなす関係性について考えてみたい。

I ミランダの記憶

空白の記憶を埋める語り

アロンゾー一行の船が嵐の海に吞まれたのを確認すると、プロスペローはこれまで封印してきた過去の話ミランダに語り始める。これから重要な語りが行われることを宣言し、心して聞くよう命じたうえで、プロスペローはまずミランダの記憶について確認する。

The hour's now come,
The very minute bids thee ope thine ear.
Obey, and be attentive. Canst thou remember
A time before we came unto this cell?
I do not think thou canst, for then thou wast not
Out three years old. (1.2.36-41)⁽¹⁾

この時点ではプロスペローは幼かったミランダが何も覚えているはずもなく、これから行われる自分の語りの権威については、疑いの余地がないと思っている。つまり自分が語ろうとする内容が、空白のミランダの記憶を埋める唯一の物語になることに自信を持ち、あまつさえその事実を娘に印象づけるために、最初にこのような質問をしたとも考えられる。しかしミランダの答えは意外にも、

「いいえ、覚えておりますとも、お父様」(1.2.41) というものであった。ミランダの唯一の記憶は、自分が複数の侍女たちの世話を受けていたという、偶然にもこれから明かされる彼女の本当の身分を暗示するような内容であった。

'Tis far off;

And rather like a dream than an assurance

That my remembrance warrants. (1.2.44-6)

昔の記憶があると断言したものの、ミランダはそれが夢のように断片的で、不明瞭なものであるとことわっている。その口調には、父親が持つ唯一絶対の記憶の権威を損なわないための配慮も感じられる。ミランダの記憶が真実を言い当てていたことに驚くプロスペローだが、それでもミランダの過去の記憶自体は、「暗黒の過去の、時の深淵」のような光のない混沌だと断じている。

But how is it

That this lives in thy mind? What seest thou else

In the dark backward and abysm of time? (1.2.48-50)

こうしてミランダの唯一の記憶は確認され、そこで途切れる。そして彼女の「開いた耳」にプロスペローの物語が注ぎ込まれる。以後ミランダの空白の記憶は、プロスペローの語りによって埋められていく。そこには父親の語る過去を、真実の記憶として受容するミランダの姿があるのだ。

アイデンティティと記憶

プロスペローはこれまで明かさずにきたミランダの出自について、次のように語り始める。

Mir. Sir, are not you my father?

Pros. Thy mother was a piece of virtue, and

She said thou wast my daughter; and thy father

Was Duke of Milan, and his only heir

And princess no worse issued. (1.2.55-9)

ここでプロスペローが行っているのは、わずかな断片しかなかったミランダの出自に関する記憶を、父親として補う作業である。その際、いかなる記憶を何と結び付けて与えるかは、プロスペローの選択にかかっている。彼が娘に最も与えたい記憶は、ミランダが「正統な」ミラノ公爵である父親の、「真正な」後継者であるということに他ならない。母親が何者かということは、娘のアイデンティティ形成に必要な記憶としては選択されていない。母親は父親の血筋を正しく伝えるための媒

体であり、血統の信頼性を保証する母親の貞節だけがここでは問題となっている。「操の正しい女だった」というミランダの血統を保証する事実は同時に、プロスペローが語る唯一の妻の記憶でもある。ミランダ自身もまた自分の祖母に言及する際、父親と同じ論理を用いる。叔父アントーニオによる肉親の情に悖る裏切りを評して、彼女は次のように述べている。

I should sin

To think but nobly of my grandmother:

Good wombs have borne bad sons.

(1.2.118-20)

プロスペローやミランダにとって、母親、妻、祖母という女性の記憶は、専ら父親から受け継がれた血統の正しさを証明するために存在している。女性の貞操に依存しなければ維持できない父系血統に対して、父親がたとえ何者であろうと揺るぎのないキャリバンの女系血統の逞しさが印象的である。

語りと応答

1幕2場でのミランダの役割は、ひたすら受動的に父親の話に耳を傾けることだけではない。彼女は父親の語りをサポートする能動的な役割も同時に負っている。つまり、ミランダの反応がプロスペローのストーリーテリングを促している側面があるのだ。プロスペローの語りは、ミランダの示す様々な反応によって分節化されており、プロスペロー自身、自らの語りの方向性にふさわしい反応を娘に期待している節がある。プロスペローは娘に対して語りながら、語るという行為そのものに、はからずも聞き手としての娘の反応に依存する要素がある⁽²⁾。ミランダが自分の話を聞いていないのではないかと、語りが進行するなかプロスペローがしきりと感じている不安は、この構造的な依存関係によるものではないだろうか。

ミラノ追放の物語を聞き、父親に対する憐れみと感謝を示すミランダではあるが、彼女は父親の術によって海に吞まれた敵の一行に対しても、それに劣らぬ憐れみを示している。話を聞いていないとプロスペローにたしなめられるのは、実際にミランダが難破の場面に気を取られて、上の空であった可能性もある。1幕2場の冒頭、ミランダは嵐が父親の魔術の仕業だと気づき、海を沈めてくれるよう懇願しながら、自分にも同様の力があれば難破を阻止していただろうにと嘆く。

Mir. If by your art, my dearest father, you have

Put the wild waters in this roar, allay them.

.....

Poor souls, they perish'd.

Had I been any God of power, I would

Have sunk the sea within the earth or ere

It should the good ship so have swallow'd, and
The fraughting souls within her.

Pros. Be collected,
No more amazement. Tell your piteous heart
There's no harm done.

(1.2.1-2, 9-15)

父親の魔術に拮抗できる力があれば、自ら父の企てを無効にしていたはずだと口にするミランダ。そのような娘の言葉についてプロスペローは、彼女を突き動かし、自分の魔術の結果に異議を唱えさせているのは「憐れみ」(pity)だと判断している。その憐れみに満ちた優しい娘の心をたのみとして、彼はこれまでの苦難の身の上を語り続ける。しかし島に流れ着いた経緯を聞いてなお、ミランダの関心は先刻の嵐にあるようだ。

Pros. Now I arise. [Puts on his robe.]
Sit still, and hear the last of our sea-sorrow:
Here in this island we arriv'd, and here
Have I, thy schoolmaster, made thee more profit
Than other princes can, that have more time
For vainer hours, and tutors not so careful.

Mir. Heavens thank you for't! And now I pray you, sir,
For still 'tis beating in my mind, your reason
For raising this sea-storm?

(1.2.169-77)

今日まで娘の教育に心血を注いできたことへの感謝の言葉もそこそこに、ミランダは父親の企ての意図を問う。それに対してプロスペローは、嵐を起こして手中に収めた敵たちに、まだ復讐を果たすとも慈悲をかけるとも言えず、言葉を濁す。嵐を起こしたことにより、既に自らの意図に対して娘の疑念に曝されるプロスペローは、この窮地を乗り切るために、娘の質問を封じ、彼女を眠らせる。

Here cease more questions.
Thou art inclin'd to sleep; 'tis a good dullness,
And give it way. I know thou canst not choose.

[*Miranda sleeps*] (1.2.184-6)

Heather James の指摘のように、父親よりもその敵に対して憐れみを示すことで、間接的に父親の権威に異議をさしはさむミランダのこの行為は、続いて登場するエアリエルやキャリバンによるプロスペローへの反抗の先駆けとも解釈できるだろう⁽³⁾。

Ⅱ エアリエルの記憶

記憶の領有

『テンペスト』には個人の記憶が、物語りを通じて集団の記憶、すなわち「歴史」となる様が描かれている。その例がプロスペローがエアリエルに対して行う、シコラックスに関する語りである。シコラックスはプロスペローが島に来る以前に死んでおり、彼自身は実際にシコラックスを目にしたことはないはずである。プロスペローが知るシコラックスの情報は、全てエアリアエルからの伝聞に過ぎない。にもかかわらず、プロスペローはあたかも邪心に凝り固まり、腰の曲がった老婆の姿を目のあたりにしたかのような描写をしている。プロスペローはエアリエルの記憶を自らの記憶として領有し、それを島の「歴史」として物語ることで、逆にエアリエルの記憶を支配しているのだ。

シコラックスの記憶はまた、エアリエルを服従させるためにプロスペローが習慣的に用いているものでもある。エアリエルが反抗すると、プロスペローはシコラックス時代の忌まわしい労働と肉体的苦痛を思い出すよう強制する。

Pros. Thou liest, malignant thing! Hast thou forgot
The foul witch Sycorax, who with age and envy
Was grown into a hoop? Hast thou forgot her?

Ari. No, sir.

Pros. Thou hast. Where was she born? Speak. Tell me.

Ari. Sir, in Argier.

Pros. O, was she so? I must
Once in a month recount what thou hast been,
Which thou forget'st. This damn'd witch Sycorax,
For mischiefs manifold, and sorceries terrible
To enter human hearing, from Argier
Thou know'st was banish'd; for one thing she did
They would not take her life. Is not this true?

Ari. Ay, sir.

(1. 2. 257-68)

こうして日々訓練されるエアリエルの記憶は、「シコラックスを思い出せ」という命令によって、肉体的な感覚と結びついた忌まわしい過去がフラッシュバックするよう、一種のプログラム化されているのだ。

一方、逆にエアリエルがプロスペローに「思い出す」よう抗議する瞬間もある。次々に仕事を言いつけるプロスペローに対して、エアリエルは彼の「忘れっぽさ」をなじる。

Ari. Is there more toil? Since thou dost give me pains,
Let me remember thee what thou hast promis'd,
Which is not yet perform'd me.

Pros. How now? Moody?
What is't thou canst demand?

Ari. My liberty.

Pros. Before the time be out? No more!

Ari. I prithee,
Remember I have done thee worthy service,
Told thee no lies, made thee no mistakings, serv'd
Without or grudge or grumblings. Thou didst promise
To bate me a full year.

Pros. Dost thou forget
From what a torment I did free thee? (1.2.242-51)

Jonathan Baldo によれば、年季明けを早める約束を思い出させようとするこのエアリエルの行為が問題となるのは、その内容のせいではなく、プロスペローの特権的な支配領域である記憶に関して、エアリエルが異議申し立てを行ったからである⁽⁴⁾。このような抗議を受けて、プロスペローは即座に相手の記憶の欠陥、すなわち助けてやったことへの忘恩を責める。そして逆に「シコラックスを思い出せ」という命令を突きつけるのだ。

語りと支配

プロスペローの記憶操作に不可欠な要素は、彼の卓越した語りの技術である。プロスペローの語りはその雄弁さに加えて、自らが不利にならぬよう語るべき内容を選択し、議論のすり替えを行うなど、弁論家としての高い技術にも支えられている。卓越した語りの能力を用いて、他者の記憶を支配することによる専制絶対主義。これこそが魔術を用いた物理的拘束に加えて、プロスペローによる他者支配を可能にしている力に他ならない。プロスペローがミラノ時代に没頭したのが“liberal arts” (1.2.74) の研究であったのも、彼が物理的な力を操る魔術師であるとともに、言葉を操るソフィストとしての側面を併せ持っていることを示唆している⁽⁵⁾。

プロスペローの記憶と語りを用いた支配は、既に親子や主従の関係にある相手だけに及んでいるわけではない。プロスペローはエアリエルを使って腹話術のように昔語りをさせることで、一行の記憶を蘇らせ、良心の呵責に苦しむよう仕向けている。

But remember---

(For that's my business to you) that you three
From Milan did supplant good Prospero,
Expos'd unto the sea (which hath requit it)
Him, and his innocent child; for which foul deed
The pow'rs, delaying (not forgetting), have
Incens'd the seas and shores---yea, all the creatures,
Against your peace.

(3.3.68-75)

エアリエルは最初に過去の罪を「思い出させる」ことが自らの使命であると明言している。ここでは一行の罪に対する復讐を「遅れこそすれ忘れてはいない」のはプロスペロー自身であるにもかかわらず、天が罪を記憶しているという表現が用いられている。すなわち個人的な記憶を天の記憶と呼ぶことで、プロスペローは絶対者としての立場から断罪を行っている。プロスペローの復讐はアロンゾー一行の記憶に対する復讐なのである。

思えばアントーニオの最初の罪は、「己の記憶を罪びとにして、我こそは真の公爵だと思い込んだ」ことにあったとプロスペローは言う。

like one

Who having into truth, by telling of it,
Made such a sinner of his memory
To credit his own lie---he did believe
He was indeed the Duke .. .

(1.2.99-103)

父親に与えられた記憶で自らのアイデンティティを発見したミランダとは対照的に、アントーニオは偽りの記憶で己のアイデンティティを書き換えた人物だと言えよう。

Ⅲ キャリバンの記憶

シコラックスの記憶

キャリバンにとって、母シコラックスの記憶はプロスペローに抵抗するための根拠と力の源である。シコラックスの記憶はまた、エアリエルやプロスペローにとっては忌まわしい過去の象徴として強力な意味を持ち続けている。プロスペローにとってキャリバンは何よりも「鬼婆の落とし子」(“[h]ag-seed” 1.2.364)であり、彼の生来の性根の悪さは母親の邪悪さと結び付けられている。

プロスペローはキャリバンの父親は悪魔であると述べている(“Thou poisonous slave, got by the devil himself / Upon thy wicked dam” 1.2.319-20)が、真偽は定かではない。キャリバンの父親

についての情報は、このプロスペローの糾弾以外、テキストのどこにも存在していない。キャリバンさえ父親が何者が語らず、あるいはプロスペローの主張する魔女の性的逸脱のスティグマをあてはめるならば、シコラックス自身も子の父親が分からない可能性すらある。重要なのは父親の正体が究極的に不明である以上、母親の子であるという事実が重みを増すことである。キャリバンは何よりも母の息子としてアイデンティティが色濃いのである。父親が何者であろうと揺るぎのないキャリバンの母系血統の逞しさは、プロスペローの妻やミランダの貞潔に依存しなければ維持できないミラノ公爵の父系血統と対照的である。

抵抗の手段としての記憶

プロスペローは卓越した語りの技術によって、記憶から物語を、物語から歴史を生成する能力に長けており、それを島での支配に活用している。しかし『テンペスト』の登場人物の中で、プロスペローが格段優れた記憶力を誇っているというわけではない。その鮮やかな記憶力が印象的なのはむしろキャリバンである⁽⁶⁾。プロスペローはエアリエルの忘れっぽさを叱責することはあっても、キャリバンの忘れっぽさを口にすることはない。キャリバンの性根の悪さを非難しこそすれ、もの覚えの悪さを罵倒するような機会は訪れない。事実、キャリバンはプロスペローの支配にとっては、余りに良すぎる記憶力と学習能力を持っている。1幕2場で登場して間もなくのキャリバンは、島に上陸した当初の、プロスペローとの蜜月時代の記憶を鮮明に語っている。

This island's mine by Sycorax my mother,
Which thou tak'st from me. When thou cam'st first,
Thou strok'st me and made much of me, wouldst give me
Water with berries in't, and teach me how
To name the bigger light, and how the less,
That burn by day and night; and then I lov'd thee
And show'd thee all the qualities o'th' isle,
The fresh springs, brine-pits, barren place and fertile.
Curs'd be I that did so! All the charms
Of Sycorax, toads, beetles, bats light on you!
For I am all the subjects that you have,
Which first was mine own king; and here you sty me
In this hard rock, whiles you do keep from me
The rest o'th' island. (1. 2. 331-44)

蜜月時代の記憶を失っていないだけに、現在の捕囚に対する呪詛の言葉も生々しい。彼はまた母から受け継いだ呪いを覚えており、それを新たに学習した支配者の言葉で反復する。教化のために与

えられた言葉は、今やキャリバンにとって呪うための武器である。

キャリバンの記憶力と言語運用能力がとりわけプロスペローにとっての脅威となるのは、彼が母シコラックスから受け継いだ島の所有権を主張し、自らの物語を展開する瞬間である⁽⁷⁾。彼は不満や呪いの言葉を発するだけでなく、プロスペローの語る島の歴史物語に対して、オルタナティブとなる物語を提示している。自らの物語を語る行為の威力について、キャリバン自身は特に意識的ではないように思える。しかし彼は失われたプロスペローとの蜜月時代を鮮やかに回想しながら、プロスペローにとっては非常に都合の悪い、もうひとつの物語を雄弁に語っている。キャリバンはただ悪態をつき、真っ向から権利を主張して抵抗するだけでなく、回想という形で記憶から物語を紡ぎ出す。その行為によって彼はプロスペローに対峙できる、想像以上の力を得ていると言えよう。

またキャリバンの回想は、入植者が島に上陸し、土地の人間を懐柔し、ネイティブ・インフォーマントとして利用した挙句、搾取と支配を始めるまでの過程を連想させるような内容である。これが当時の植民地政策の実態を反映したものであるか否かは、歴史的な検証を必要とする別の課題であるが、少なくともここでは非常に悪い植民支配のイメージが喚起されている。キャリバンの回想によって「悪しき植民者」としてのプロスペロー像が形成されているのだ。さらに回想の最後では、「元は俺が俺自身の王だった。そしてお前が俺を閉じ込めて、俺から土地を奪った」と主張する。これはプロスペローによる土地の奪取のみならず、島の歴史における象徴的な王位篡奪を示唆するような不穏な発言である。これによりプロスペロー自身のこの島での王位篡奪疑惑も露呈するのである。

Pros. Thou most lying slave,
Whom stripes may move, not kindness! I have us'd thee
(Filth as thou art) with human care, and lodg'd thee
In mine own cell, till thou didst seek to violate
The honor of my child.

Cal. O ho, O ho, would't had been done!
Thou didst prevent me; I had peopled else
This isle with Calibans. (1.2.344-50)

こうしたキャリバンの主張に対して、プロスペローは真っ向から反論することはできずにいる。「この嘘つきめ！ お前には慈悲よりも鞭が必要だ」とややヒステリックに罵るだけで、プロスペローはキャリバンの言い分を具体的に否定はしない。そのかわりに彼はキャリバンによるミランダ強姦未遂に言及し、それを理由にキャリバンを閉じ込めた行為を正当化する。いわば論理のすり替えを行って反撃に出るのだ。娘の強姦未遂という、プロスペローにとっては苦くもあるが、唯一キャリバンの主張を退けるに足る破壊力と重要性を持った記憶は、キャリバンにとっては愉快かつ残念な記憶なのである。

IV プロスペローの記憶

王位篡奪の記憶

他者の記憶を操作するプロスペロー自身に記憶の危機が訪れるのは、仮面劇の上演中に演出家の役目に夢中になるあまり、自らの暗殺計画を忘れそうになる瞬間である。プロスペローにとっては、かつて公爵としての本分を忘れて学問に没頭するあまり、致命的な結果を招いた前例があるだけに、この瞬間が本人にもたらす衝撃は大きい。仮面劇を中断させたプロスペローの様子を見たファーディナンドとミランダも、そのかつてない怒りの形相に、尋常でないものを感じている（4.1.143-5）。しかし容易に鎮めることができるはずのキャリバン一味の茶番のクーデターに、プロスペローはなぜこのような過剰な反応を示したのだろうか。劇中二度企てられる王位篡奪劇は、かつてプロスペロー自身に起こった原体験であった⁽⁶⁾。嵐を起こして一行を呼び寄せたこの島で、プロスペローが企てたのは、忌まわしい過去を再現し、その修正を通じて、失われたものを贖う行為である。それは言い換えれば再現—修正—再生のプロセスを経て完結する物語でもある。

過去の再現—修正—再生

島で再現される一度目の篡奪劇は、明らかにプロスペローの用意した状況の中、アントーニオとセバスチャンの共謀により誘発され、予定通り未然に阻止される。プロスペローにとっては、自分を陥れた人物に再び兄殺しを計画させ、今度は未然に阻止することに意味があるのである。しかし最初の篡奪劇を首尾よく処理した後、娘の結婚を祝う仮面劇の最中に、決着したはずの悪夢が再び闖入してくる。プロスペローの過剰な苛立ちは、それが茶番の暗殺劇であろうと、完結した物語の中に封印されたはずの忌まわしい過去が、不意に回帰してきたことに対するものではないだろうか。

既に論じたように、プロスペローがこの島で再現してみせたのは、王位篡奪という *Old World* のドラマである。過去の出来事を語り、再現し、そこから導かれる再生の未来は、忌まわしい過去との和解の先にある。ミランダにとって驚嘆すべき *New World* は、*Old World* で起きた王位篡奪の過去を、プロスペローが再現し、修正し、受容した結果もたらされた世界である。ミランダに罪の許しを乞おうとするアロンゾーを遮って、プロスペローは「過ぎ去った重荷を記憶に背負わせることはすまい」(“Let us not burthen our remembrances with / A heaviness that’s gone” 5.1.199-200) と言う。篡奪者たちへの赦しは、プロスペローにとっては過去との和解、自らの苦い記憶との和解の行為でもあったのだ。

註

本論は2005年10月10日に日本女子大学で開催された第44回シェイクスピア学会でのセミナー『『テンペスト』を読む』の発表原稿に基づき、加筆・修正を施したものである。

- (1) シェイクスピアの作品からの引用ならびに行数表示は、*The Riverside Shakespeare*, 2nd ed. による。
- (2) この語りの上での構造的な依存関係点については、Hadry 110; James 369-70; Orgel 16参照。
- (3) James, 368.
- (4) Baldo, 133.
- (5) Cheyfitz, 26.
- (6) 記憶を保持することが抵抗の手段となり得ることの分かりやすい例としては、ハムレットの場合が挙げられる。あまりに「忘れっぽい」母親と、新しいイデオロギー作りのために忘却を奨励する篡奪者に対して、かたくなに父王の記憶を保持しようとすることで、ハムレットは抵抗する。まるで集団記憶喪失に冒されたようなクロードシアスの宮廷にあって、一人父親の死を忘れずに抵抗を続けている。しかも亡霊が復讐と共にハムレットに命じるのは、“Remember me”である。
- (7) Michael Neill が指摘するように、権力の獲得に伴うのは、自らの物語を語る権利の獲得である。(Neill, *Issues*, 222参照。) 例えばハムレットの復讐の最後を締めくくるのは、篡奪者のフィクションを打ち破り、自らの物語を語ることである。生き残るホレイシオーに託されるのはハムレットの物語のナレーターとしての使命である。

O God, Horatio, what a wounded name,
Things standing thus unknown, shall I leave behind me!
If thou didst ever hold me in thy heart,
Absent thee from felicity awhile,
And in this harsh world draw thy breath in pain,
To tell my story. . . . (5.2.344-9)

- 8) アロンゾーが死んだと確信してナポリ王を名乗るファーディナンドを、プロスペローは「王の名の篡奪者」であり、プロスペローから「領土を横取りしようと潜入したスパイ」だと糾弾する (Thou dost here usurp / The name thou ow'st not, and hast put thyself / Upon his island as a spy, to win it / From me, the lord on't." 1.2.454-7)。後半はプロスペローの言いがかりだが、実際は父親が生きている以上、ファーディナンドもまた潜在的な王位篡奪者ということになる。

参 考 文 献

- Barker, Francis and Peter Hulme. "Nymphs and reapers heavily vanish: the Discursive con-texts of *The Tempest*." Ed. John Drakakis. *Alternative Shakespeares*. London: Methuen, 1985. London: Routledge, 1988.
- Baldo, Jonathan. "Exporting Oblivion in *The Tempest*." *Modern Language Quarterly* 56 (1995): 111-44.
- Cheyfitz, Eric. *The Poetics of Imperialism: Translation and Colonization from The Tempest to Tarzan*. Oxford: Oxford University Press, 1991.
- Hardy, Barbara. "Shakespeare's Narrative: Acts and Memory." *Essays in Criticism* 39 (1989): 93-115.
- James, Heather. "Dido's Ear: Tragedy and the Politics of Response." *Shakespeare Quarterly* 52 (2001): 360-82.
- Kott, Jan. *The Bottom Translation*. Evanston, Ill: Northwestern University Press, 1987.
- Neill, Michael. "Remembrance and Revenge: *Hamlet*, *Macbeth*, and *The Tempest*." Ed. Ian Donaldson. *Jonson and Shakespeare*. Atlantic Highlands, NJ: Humanities, 1983. 35-56.
- _____. *Issues of Death: Mortality and Identity in English Renaissance Tragedy*. Oxford: Clarendon Press, 1997.
- Orgel, Stephen. Introduction. *The Tempest*. By William Shakespeare. Oxford: Oxford University Press, 1987. 1-87.
- Shakespeare, William. *The Tempest*. Ed. Stephen Orgel. Oxford: Oxford University Press, 1987.
- _____. *The Tempest*. Eds. Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan. London: Thomas Nelson and Sons, 1999.
- _____. *The Tempest*. Ed. David Lindley. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
- _____. *The Riverside Shakespeare*. Ed. G. Blakemore Evans. 2nd ed. Boston: Houghton Mifflin Company, 1997.
- リクール, ポール. 『記憶・歴史・忘却<上>』 久米博訳. 新曜社, 2004年. Paul Ricœur. *La Mémoire, L'Histoire, L'Oubli*. Edition du Seuil, 2000; rééd. coll. 《Points Essais》, 2003.
- _____. 『記憶・歴史・忘却<下>』 久米博訳. 新曜社, 2005年. Paul Ricœur. *La Mémoire, L'Histoire, L'Oubli*. Edition du Seuil, 2000; rééd. coll. 《Points Essais》, 2003.